

# 学生向けセミナー「水環境ビジネスガイダンス」報告

産官学協力委員会 アジレント・テクノロジー株式会社 福地 敏 治  
ライオン株式会社 木 島 雄 平

## 1. 企画の趣旨

本セミナー「水環境ビジネスガイダンス～水環境の仕事に興味のある学生の皆さんへ～」は、平成19年度の第42回年会から始まり、今年で18回目を迎える。本セミナーは、学生の皆さんに水環境分野の仕事に興味を持つきっかけとして、就職活動ではなかなか得られない現場発の生の情報を直接技術者から聞く機会を提供することに重点を置いて企画されている。プラントエンジニアリング、コンサルタント、化成品、官公庁等の各分野で活躍する講演者を招き、実際の業務内容や職場での働き方、仕事の楽しさややりがい、学生時代の専攻との繋がりなど、生の声を通じて業界の魅力や業種の多様性を伝え、今後の就職活動に向けて進路選択の参考となる情報を提供することを目的としている。また、本年は男女共同参画推進委員会との共催として、ワークライフバランスや子育てとの両立などについても各団体の取り組み事例を紹介し、参加者が水環境の業界で働いている自分の姿がイメージできるような情報の提供を目指した。

## 2. セミナーの概要

本セミナーは、第59回日本水環境学会年会の2日目にあたる2025年3月18日の昼休み時間(12:20～13:25)を利用して開催された。5名の講演者が各々約10分間、現在携わっている水環境関連の業務内容や仕事の魅力、やりがい、ワークライフバランスや子育てとの両立などについて紹介した。長年にわたる関係者の尽力により本セミナーが年会イベントとして定着し、本年も定員100名のところ99名が参加する盛況ぶりとなった。参加者の関心は高く、本セミナーは水環境ビジネスの重要性と魅力を伝える重要な機会になった(写真1)。

## 3. 講演者およびその講演概要について

### (1) 環境省 水・大気環境局

鈴木清彦氏

鈴木氏は水環境に関わる公務員の業務として、環境省、国交省等の省庁に加えて、地方公共団体における環境行

政、ならびに水道や下水道についても紹介した。水道については、市町村が経営する水道局のほか、複数の市町村が組合を設けて運営を行う「水道企業団」があり、とくに後者は、地方公務員の身分でありつつも他の分野への異動が少なく水道のみ担当できるという点も紹介された。また、政府と自治体の公務員の業務の違いとして、政府では水質基準や水質検査方法といったルールを決めている一方で、地方公共団体では、当該ルールに基づき、事業者の規制や事業の運営などを行っている点を挙げた。環境省では、制度や基準づくりから地域づくり、さらには国際協調など、幅広い業務があることを紹介した。鈴木氏の実際の仕事の場面では、国会対応を除けば自らスケジュール管理が可能なこと、男性の育休取得の状況等を紹介した。最後に環境政策に携わるやりがいを強調した。

### (2) 東京水道株式会社

中村聖子氏

中村氏は講演で、東京水道株式会社が担う水道水の供給事業(設計業務等)について、「水源から蛇口まで」というキャッチフレーズを使用し、東京都民の暮らしを支えるスケールの大きさと社会的な意義について深く掘り下げた。担当する水質管理業務の中では、サンプリングから測定まで、学生時代に培った技術や知識が大いに役立っていることを強調された。検査結果を出して終わりではなく、その検査結果を運転管理にいかに繋げていくかが重要であり、そこに仕事の難しさとやりがいがあると述べた。また、業務の性質上、異常対応が発生することはあるが、「ライフワーク」バランスと称し、質の高いワークの土台となるライフを重要視するユニークな自社の仕組みを紹介した。また、自身を例に育児短時間勤務制度を活用した1日の生活の流れを説明した。

### (3) 水道機工株式会社

山中美菜子氏

山中氏は環境問題への興味から学部時代は環境システム工学科に進学し、修士時代の環境都市専攻での排水処理に関する研究テーマを契機に、水環境を守りたいという想いを軸に就職活動を行った。入社後は、研究開発業務から処理フローの設計、広報を含む企画業務など、幅広い業務を担当してきた。とくに、公的機関への発表や大型プロジェクトの企画立案など、早い段階で経験できたことがその後の糧となっていると述べた。学生時代からの大きな変化として、コスト感および市民へのベネフィットの意識を挙げた。会社には「常にプロフェッショナルであれ」という教えがあり、プロフェッショナルとして仕事を充実させるために、プライベートの充実をサポートする諸制度が整備されていることを紹介した。その中で、育休取得者の具体事例として、開発担当者および設計担当者における柔軟な働き方、休み方を紹介し、仕事もプライベートも妥協せず全力で取り組めることがやりがいに繋がっていると結んだ。



写真1 セミナー会場の様子

#### (4) 月島 JFE アクアソリューション株式会社

坂本悠生氏

坂本氏は現在、汚泥処理の業務に携わっており、従来は焼却処理が一般的であった汚泥処理工程について、燃料化を実現するため、多岐にわたるプロセスに携わっている。また、お客様の要望と環境負荷の両面を考慮した検討が必要である。学生時代からの大きな変化として、自らの仕事の先に一般の方がいることを挙げ、納期意識に繋がっていると述べた。また、プロセスに携わる広い関係者がいることを挙げ、円滑なコミュニケーションが重要であることを述べた。自身が経験した水処理から汚泥処理への担当の変更については、どちらも有害なものを処理するという軸で見ると同じであるとして、前向きに捉えたエピソードを紹介した。働き方については、所属部署の男性の育児休暇取得率が100%であるなど、子育てに配慮したテレワークや有給休暇、時差出勤などの制度が整備されていること述べた。また、外国人の活躍状況についても紹介があった。

#### (5) 三菱ケミカルアクア・ソリューションズ株式会社

本田真樹氏

本田氏は大学院で機械システム工学を専攻し、研究テーマで扱った雪との関連性から、水処理業界への就職を志望した。大学で学んだことを活かせる部署に配属となり、エンジニアリング業務を担当している。仕事の苦勞として、学生時代に学んだ理論を設計業務に結びつけることの難しさを実感している点を挙げた。エンジニアリング業務の醍醐味として、自身が設計した設備が形になり、稼働している姿を見えることがやりがいに繋がっていると述べた。設計を進めていく上では、基本設計に始まり調達、製作、試運転に至るまで多岐にわたる工程があり、チームプレイの重要さと正しく情報を伝えるためのコミュニケーションが不可欠であることを述べた。また、業務ルーティンの事例として、オフィスと現場それぞれで一日の仕事の流れが異なることや、フレックスタイムやテレワークをはじめとした各種制度について紹介があった。

#### 4. アンケート集計結果

セミナーに参加した学生の満足度と意見を把握し、今後の企画を一層学生にとって価値のあるものにするために、アンケート調査を実施した。49名の参加者から回答を得ることができ、結果は以下の通りであった。

- 参加学生の内訳は、学部生 54%、大学院前期課程 35%、大学院後期課程 10%、高専学生 0%であった。
- 参加の動機は、「水環境関連の仕事に興味があり、就職活動の参考にしたから」が48%、「就職とは無関係に、水環境関係の仕事への理解や知識を深めたいから」が30%、「昼休みを有効に使いたかったから」が18%であった（複数回答含む）。
- 目指す水環境分野の業種については、プラントエンジニアリング業が30%、化学品（化成品／膜／医薬品／化粧品等）などの製造業が20%、コンサルタントが19%、公務員が9%、大学・公的研究機関の研究員が9%、土木建設業が7%、装置・分析機器製造業が6%と

なった（複数回答含む）。

- 興味がある部門については、研究開発部門が55%、技術・設計部門が30%、建設・工事部門が4%、総務企画部門が4%、営業部門が2%となった（複数回答含む）。
- 「本セミナーが参考になったか？」という質問に対しては、「参考になった」が98%、「期待したほどではなかった」が2%であった。
- 参考になった点としては、水環境の仕事と言っても色々な業務内容があると学べた、「水関係の企業がどのような業務をしているか、また公共団体とのかかわりを知ることができた」、「働く上での一日のスケジュール感や会社の決め手を知ることができた」、「ワークライフバランスについて、制度がどのように活用されているのかを実例として知ることができた」、「ワークライフバランスの例があり、自分が将来働いた時の姿が想像しやすかった」などの意見があった。
- 参考にならなかったと感じられた点としては、「それぞれの事業体系についてももう少し簡潔に示して欲しかった」、「仕事の楽しさをもっと知りたかった」、「学生時代に水処理の研究をしていた人にもっと登壇して欲しかった」などの意見があり、今後の開催に反映したい。
- 次回のビジネスガイダンスで登壇者から聞きたい内容としては、「水環境分野に関わる一般的な仕事の内容や楽しさについて」が43%、「団体会員の特徴的技術や商品の情報」が21%、「団体会員のワークライフバランス向上やダイバーシティ推進に関する取り組みの情報」が21%、「団体会員の採用情報」が13%であった。
- ビジネスガイダンス以外で日本水環境学会から提供してほしい情報としては、「水環境分野に関わる一般的な仕事の内容・仕事の楽しさなど」が32%、「団体会員の採用情報」が26%、「団体会員のワークライフバランス向上やダイバーシティ推進に関する取り組みの情報」が13%、「団体会員の特徴的技術や商品の情報」が11%、「とくになし」が17%であった。
- 上記情報の提供を受けたい機会、媒体については、「年会もしくはシンポジウムの昼食時（ビジネスガイダンスとは別日時）」が48%、「日本水環境学会 HP」が35%、「水環境学会誌特集記事」が13%、「その他」が5%であった。
- セミナーへの意見や要望等については、同日程で開催される年会イベントと重ならない日程の設定や、発表でのトピックスのまとめ方に関する要望などがあった。

#### 5. 総括

学生の参加者数やアンケート結果から、本セミナーは年会イベントとして学生に好意的に受け止められていると感じている。産官学協力委員会および男女共同参画推進委員会では、今後も学生のニーズに応えられるよう、本企画を充実させていきたい。

最後に、年度末のご多忙の中、貴重な経験を発表いただいた講演者の皆様、本企画に賛同しご協力いただいた講演者の所属機関の皆様に厚く感謝を申しあげる。